

「上野文庫」によせて

経済学部教授 木 崎 喜代治

京都大学経済学部所蔵の「上野文庫」の中から主としてイギリス思想史上の古典を選んで、「原典でみる近代ヨーロッパ思想の歩み」と題する展示会が附属図書館で開催されたのを機会に、その文庫についてあらためて紹介しておきたい。

この文庫のうちの注目すべき個々の文献については、すでに平井俊彦本学名誉教授が、この『静脩』1988年9月号において、かなり詳しく述べておられるので、その点については、ここでは省略することとする。それ以外の点については若干の重複を厭わず記しておきたい。

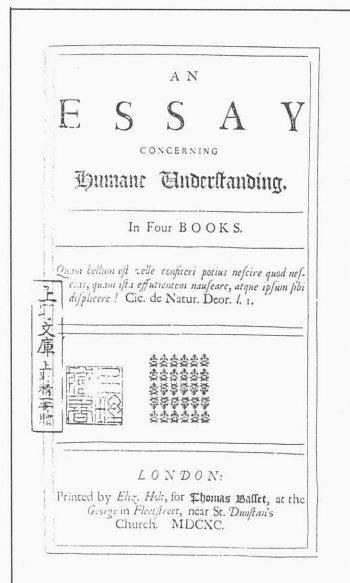
本文庫の創設者である上野精一氏は1882年10月28日、上野理一氏の長男として生まれた。上野理一氏は、いうまでもなく、朝日新聞の創立者の一人であり、古美術品の収集家としても名高い。上野精一氏は、第三高等学校、東京帝国大学法科大学を卒業したのち、日本勧業銀行に入ったが、まもなく1910年に朝日新聞社に入社し、それ以降、1970年に89歳の高齢で他界するまで、朝日新聞のためにその生涯を捧げた。

その間、1931年に『総合ジャーナリズム講座』に三回連載の長大な論文「英国新聞史論」を発表し、1945年すなわち太平洋戦争敗戦の年に、ミルトンの『アレオパジチカ』を共訳して、1948年に『言論と自由』と題して刊行した。この訳書はのちに『言論の自由』と改題されて、岩波文庫に収められている。ミルトンがイギリス革命の渦中の1644年に書いたこの著作が、言論自由論史上の最大の古典であることはいうまでもない。さらに、氏は、1967年、86歳の時に、ベン・ジョンソンの戯曲『新聞協会』を邦訳し、角川文庫の一冊として公刊した。

これらの仕事からも明らかなように、上野氏が

抱いていた理念は古典的な新聞人の理念、すなわち、言論の自由を礎石とする自由主義の理念である。ここから、氏は自由主義の祖国であるイギリスの歴史に足を踏み入れ、新聞関係文献の収集に着手する。しかし、新聞の発展の歴史は、必然的に、政治の変容、したがってまた社会の変容と密接に絡みあっている。こうして、上野氏の文献資料の収集の領域は、ジャーナリズムの歴史を越えて、イギリスの政治史から社会史にいたる歴史一般、哲学史から文学史にいたる思想史一般にまで及ぶ。さらにまた、イギリスの歴史はヨーロッパの他の諸国の歴史と深く関連しているゆえに、氏の関心は当然にもそこまで拡大していき、さらに、必然的に、日本にまで広がる。

図1. J. Locke の『人間知性論』、ロンドン、1690年刊



上野氏は、この膨大なコレクションを1955年から連続的に京都大学経済学部へ寄贈し続けたが、

氏の死後は、上野淳一氏が父の遺志を受け継いで寄贈を続け、今日に至っている。したがって、京都大学経済学部が「上野文庫」の名のもとに所蔵するコレクションは、上野家に所蔵されていた文献資料のうち、美術書や日本文学の古典籍などを除いて、経済学部へ寄贈された社会科学及び人文科学関係書である。

「上野文庫」は二部門に大別されうるが、第一は、新聞部門であり、ここには、17世紀のイギリス革命期に誕生した初期の稀覯の新聞をはじめとする多くの新聞の現物が集められているが、同時に、新聞の歴史についての研究書も網羅的に収集されていることはいうまでもない。第二は、一般部門であり、ここには、イギリスの歴史や思想史にかかわる原典および研究書がきめこまかく集められている。多数の思想家や政治家の著作の個々の事例についてはいちいち言及しないが、たとえば、ホップズの『リヴァイアサン』の3種類の初版本、ロックの8種類の全集、あるいは、スミスの『国富論』の初版から第10版までのすべての版本、などを挙げておこう。

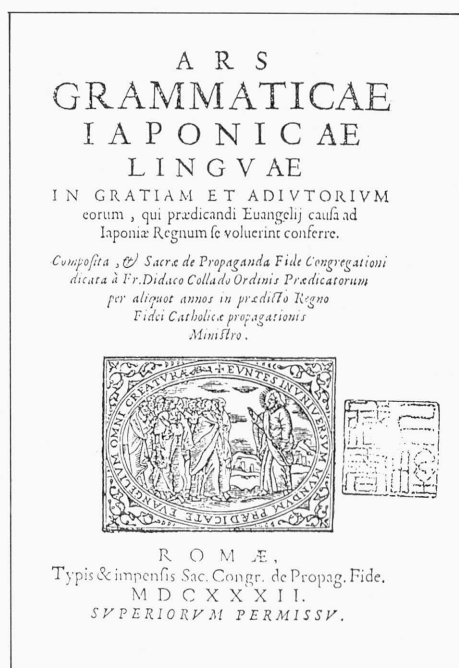
ヨーロッパ大陸の諸国が無視されているわけではなく、各国の種々の新聞や著名な著作家の原典も多数収められており、たとえば、トマス・アキナスの『神学大全』第一部の1482年ヴェニス版も所蔵されている。日本に存在する数少ないインキュナビュラのうちの一点である。日本の初期の新聞約300種、号外約120種が所蔵されていることも付け加えておこう。

和洋を合わせて、新聞部門は全体の約26パーセント、一般部門は約74パーセントを占める。

さらにまた、上野氏の関心は出版史にも向けられており、出版史や出版統制史の研究書はもちろん、著名な出版人の伝記や、ケルムスコット・プレス版をはじめとする美しい版本が集められている。また、イエズス会宣教師の日本からの種々の書簡集、東インド会社のモンタヌスの報告書、ケンペルの大著など、江戸時代の日本関係書が100点以上揃っていることも特筆すべきであろう。さいごに、イギリスの著名な思想家や政治家の自筆書簡が約20点所蔵されていることを付け加えてお

こう。グラッドストーン、バーク、ゴドウィン、カーライルなどの名前が見える。

図2. Collado の『日本語文法』、ローマ、1632年刊。



この文庫の目録はこれまで二回（6分冊）刊行され、現在、第7分冊が印刷中である。これら全7冊が収める文献の総数は、総計で、洋書約21,800冊、和書約4,700冊、合計約26,500冊に達する。個人の蔵書としては、一万冊を超えることはすでに稀であるから、この数字は世界的にみても例外的である。

しかも、このコレクションは、無秩序に集められたものではなく、明確な目的のもとに組織的に収集されたものであるから、その学問的利用価値はきわめて大きい。上野氏が、思想家の著作の多くの版本などを系統的に収集するためにいかに注意深い作業をなしたかは、現在残されている23冊にのぼる上野氏直筆の収書ノートから明らかに読み取ることができる。

「上野文庫」の意義は、しかしながら、以上に尽きるものではない。本文庫の形成者上野精一氏が生きた時代は、ちょうど日本の近代化の時期であり、わが国がその近代化に伴うさまざまな矛

盾に苦しんでいる時代であった。上野氏もまたその苦しみを体験して、イギリス思想史の研究者となったのであった。しかも、氏は、同時に、日本を代表する新聞社の社主であった。このような二つの資格が結合することは稀なことであろう。国民が苦難の時期を生きているとき、世論の形成において新聞が演じなければならない役割はきわめて大きい。しかも、当面する問題は国民全体の近代化であり、その自由の樹立なのである。したがって、上野氏がこの収集に情熱を傾けるのには、個人的・社会的必然性があったのである。すなわち、上野氏個人にとって、日本の現代をいかに把握し、それにたいしていかなる態度をとるかという問題があり、他方、社会的メディアとしての朝日新聞がこの日本にたいしていかに社会的責務を果たすかという問題がある。こうしたことを考えるとき、このコレクションの持つ意味は深く重い。

さいきん、外国の文献のコレクションが日本の（多くの場合、私立の）大学図書館によって（必ず、きわめて高価で）購入されたという話をよく耳にする。それ自体は、喜ばしいことであろう。

ただ、「上野文庫」がそうした出来合いの収集品とは決定的に異なっていることは、上記の点から明らかである。その収集者は、日本人であり、しかも、研究者としてばかりでなく、日本の代表的新聞社の社主として、近代日本の形成に深く関わっていた。このコレクションは、日本の一近代精神の歩みを語ると同時に、近代日本史の一証人、いや、近代日本史そのものであるといわなければならない。

経済学部が所蔵する「上野文庫」の展示会「原典でみる近代ヨーロッパ思想の歩み」は、さる4月17日(木)から4月26日(金)までの8日間、京都大学附属図書館展示室において開催された。主としてイギリス思想史の古典から約120点を厳選し、そのほか、一般の関心を引くと思われる江戸時代の日本関係洋書やイギリスの印刷関係洋書を合わせて展示した。入場者数は合計647名であった。

(経済学部)